

告 辞

春爛漫桜の花が満開となった本日ここに、佛教大学学部、大学院、別科（仏教専修）の入学式を挙行できますことは、大きな喜びであります。皆さん、あらためて、ご入学おめでとうございませう。新型コロナウイルス感染症の拡大によって、一年遅れとなりましたが、「入学おめでとう」の気持ちを対面で伝えられる日を迎えられることを嬉しく思います。教職員の、何とか新2年生になる前に1年遅れでも入学式ができないかという思いから、この度一年越しの入学式を挙行する運びとなりました。また、ご子息・ご息女を慈悲の心をもって温かく見守ってこられたご家族・保護者の皆様には、今日までのご苦勞に敬意を表しますとともに、心よりお喜びを申し上げます。

4月から2年生になられる皆さんには、入学された当初から、大学が始まったにもかかわらず、遠隔授業という大学本来の形式ではない授業が展開され、大変な不安と戸惑いの中での学生生活を送らざるを得なくなってしまったことについて、大学関係者として誠に申し訳なく思っております。

さて、昨年、本学ホームページにて「学長メッセージ」としてお届けさせていただきましたので、既にご承知だと思いますが、皆さんの佛教大学は、校名が示しますとおり、仏教を建学の精神として設立された大学であります。なかでも鎌倉時代に浄土宗を開かれた法然上人の教えをそのよりどころとしています。インドで仏教を開かれたお釈迦様は、「私とは何か」「私はどう生きるか」そして「私は自分自身に何を期待できるか」、つまり私の生きる道、人の生きる道を求めて修行され、その道を成就され、私たちに人として歩むべき道を説かれたのであります。

一方、法然上人は、末法とも呼ばれた混乱の続く不安定な時代にあって、生きることに苦しみ、天災地変や戦乱の苦しみにあえぐ人々の中で、やはり私の生きる道、人の生きる道を求められ、自己の愚かさを自覚し、念仏の道を体得し、そしてすべての人が等しく救われる道を説かれたのであります。このお二人に共通する生き様と考え方こそ、本学が建学の理念とする仏教精神に他なりません。それは智慧と慈悲ということであります。

仏教の教えに、「思いが言葉となり、言葉が考えとなり、考えがアイデアとなり、アイデアが行為となり、行為が人格を作り、人格が人生を作る」ということがあります。思いが言葉や行動として現されて初めて価値づけられることとなるのです。とくに、思考から行為への転換が、本学の教育の基本である「転識得智（学んだ知識を生きる力へ）」なのであります。そして、これこそが本学において皆さんに修得していただきたい智慧なのであります。

大学は、新しい知識を求める学生と真理に身をささげる教員とが、さらに学生と学生とが行き交い、語らい、学び合い、教え合うことで美しく輝くものであると思っております。仏教ではこれらのすべてを縁というのです。縁が変わればまた自分自身も変わるのです。自分が変われば、また縁も変わるのです。今、この佛教大学という学び舎が、諸君の縁を広げ、自分を磨く場なのであります。そこでは慈悲の心も大切です。慈悲とは、喜びや幸せを積極的に他のものに分かち与え、そして他のものの苦しみを取り去る行為であります。

まさに大学は外の世界をよく見るとともに、内の世界をもしっかりと見つめて真実を求める場なのです。

仏教学部の皆さんは、ゴータマ・ブッダと法然上人の仏教を学ぶことを通して「人間とは何か。いかに生きるべきか」を常に問いかける姿勢を、文学部の皆さんは、人間の行為の一つとして、言葉の力が、文学という形で、あるいはコミュニケーションによって人間生活を豊かにしていることを、歴史学部の皆さんは、史実を解明する

ことを通して、時の流れの中における人間の思考と行動を理解し、人間の生きる力を学修していただきたいと思っています。

教育学部の皆さんは、仏教の「時機相応」つまり、時代に生きる人に相応しく教えることによって未来の人間を育てる力をつけていただきたい。それは、きっと家庭教育の場でも、教育現場においても、また社会教育の場においても活かされるであろうと思います。

あらためて現代を省みるとき、社会はますます混沌の度を強めつつあります。とくに、先年来経験されてきたように、私たちは、ふつうの暮らしができない状況を余儀なくされてきました。その中で初めて「ふつうの暮らし」のできる事が、人間にとって如何に幸せなことであり、また必要なことであるかを思い知ることとなったのです。したがって、「如何に生きるか」を根本的問いかけとして、生き活かせながらある自分自身をしっかりと見つめ、人々の間において自分を活かして生きてゆけることのできる人格へと自己形成を図っていただきたいと思っています。

今こそ諸君にとって、夢を持つこと、チャレンジ（前向きの姿勢）、アドベンチャー（知的冒険）、イノベーション（知的開発）といった人間の智の働きが磨かれる必要があります。そうすることによって、我々はより良い充実した自分の生き方ができるとともに、他に幸せを施すことができるのです。

大学院の諸君は、自らの課題の研究に邁進していただき、学部 of 学生諸君には、それぞれの学科で自分を磨いていただき、素晴らしい実を实らせていただくことを期待して、告辞といたします。

令和3年3月29日

佛教大学長 田 中 典 彦